



第125号

2016年10月15日発行

千葉大学教育学部  
同窓会

〒263-8522  
千葉市稲毛区弥生町1-33



## 夜の散歩から

同窓会会長 貫井正納  
(S40・3卒)

自宅の近所に「御成街道」という史跡がある。徳川家康が一日で造ったと伝えられる江戸から東金までの鷹狩り用道路である。以前は道幅も狭く、未舗装で野草に覆われていたが、今はきれいに整備され、多くの人が訪れている。街道全体を歩いたことはないが、途中で史跡や公園もあり、筆者も六月ごろまでは早朝の散歩コースとして、街道に沿った公園を巡ってよく歩いていた。

ところが、先日外出した際、終車に近いバスに乗り、うっかり眠ってしまった。終点の二つ手前の停留所で気づき慌てて下車した。十時を過ぎ、月齢二十日の月は未だ顔を出さず、雲の切れ間から星が顔をのぞかせている程度だった。

下車した時は、同じ街道沿い、暗くても目印になるものも多かろうと、

高をくくっていたが、実際のところ眼の前には見えない風景が広がり、全く知らない街に来たようであった。太陽や月は、地域全体を照らす役割を持つが、沈んだ後は、それに代わる照明が必要になる。なければ、その時の私のように、知っているはずの風景さえ、認知や識別がなくなるのだ。

翻って同窓会を考える。ふだんからその役割や自分の置かれている立場などは、人に言われなくても分かっている。しかし、思わぬ事態に遭遇したり、通常の業務以外の仕事に対処しなければならなくなった時、果たしてうまく対応できるのだろうか。当面は、百五十周年記念事業であろうが、より一層会員同士の連携を密にしておくことが、私にとっての「照明」となるに違いない。

千葉大学教育学部附属特別支援学校は、平成二十四年に四十周年を迎えた。昭和四十年に附属小学校で特殊学級の開設が認可され、四十二年に附属中学校で同様に認可されて歩み始めた。その後四十八年にそれまでの小・中特殊学級が養護学校として独立した。平成十九年度より、千葉大学教育学部附属特別支援学校と校名を変更し、現在に至っている。

## 特別支援教育の発展を目指して

千葉大学教育学部附属特別支援学校校長  
(千葉大学教育学部教授) 北島 善夫



もう一つの特色は地域とのつながりである。近隣の住民からの御厚意と御協力。高等部作業班のた

昭和五十七年、現在の長沼原へ移転が完了し、同年に校歌制定発表会、新校舎落成記念・創立十周年記念式典も舉行されている。本校は、西千葉キャンパスから約7km離れ、緑に恵まれた住宅街、長沼原町に位置している。

本校の教育課程の特色の一つに、「合わせた指導」がある。正式には「領域・教科を合わせた指導」と言い、実際の生活に根ざし、生活感豊かな実践の中で行われる。遊びの指導・日常生活の指導・生活単元学習・作業学習などがそれにあたる。子供たちはその中で自信をつけ大きく成長していく。作業製品の販売会などでは、大学や附属幼稚園・小学校・中学校から多くの御協力をいただいている。

めは無償で畑を貸して下さったり、農作物の無人販売は、ほぼ毎日完売したりする。入学式や卒業式には多くの地域の方々にお越しいただいている。教員は、全てが千葉県からの人事交流者である。本校で勤務することで専門性を培い、県に戻った後、その力を十分に発揮

できるようにすることも本校の大切な使命の一つだと考えている。ここ数年は研究に加え、校内研修にも力を入れている。外部にも参加を呼びかけ、人材育成を図っている。学校評議員会や各種会議などでも、教員養成や人材育成の面で本校に対する期待をひしひしと感じる。開校から四十四年目を迎え、その責任の重大さに身が引き締まる思いである。

特別寄稿



夢は宇宙へ

JAXA宇宙教育センターアドバイザー 中村 日出夫  
(S46・3卒 神奈川県横浜市)

人類はこれまでに宇宙の真理の数%しか解明していないと言われるほど、宇宙は分からないことだらけである。たった一グラムの畑の土に生息する生物を調べた生物学者が、生息していた一千万以上の微生物のうち、九十五%が名前も性質も分からないバクテリアであったと報告している。一グラムの畑の土の中までもまだ解明されていない不思議な宇宙が存在する。

二十一世紀を迎えた現在までに、多くの科学者の努力で宇宙開発は大きく進歩してきた。一般に科学者は三つの心を持っている。知りたいという「好奇心」、行ってみたいという「冒険心」、作ってみたいという「匠の心」の三つの心である。特に、不思議なものには誰でもが好奇心を持つのは人間の本能で、好奇心は科学の出発点である。宇宙開発は我々の生活に役立つ技術や研究であり、これまでに身近な様々なものに応用されて日常生活を豊かにしてきた。次代を担う子供たちには命の大切さと

もに、何事にも好奇心を持ち、これら三つの心を大きく育てて欲しいものである。

私が宇宙に関わるようになったのは中学の頃から始めたアマチュア無線が深く影響している。三十年程前からは人工衛星を用いて交信する衛星通信に熱中し、自宅の屋上には大型パラボラアンテナまで自作し、あらゆる衛星を自動追尾できるシステムを作り上げて現在も楽しんでいる。私の衛星通信の趣味が省庁統合前の科学技術庁の耳に入ったのか、「学校の先生で変わった人がいる」と、二〇〇一年に宇宙開発委員会特別委員に推挙された。当時の宇宙開発委員会は日本の宇宙開発の舵取りを担った機関であって、産官学の錚々たる人が委員となっていた。二〇〇三年に宇宙科学研究所（ISAS）、航空宇宙技術研究所（NAL）、宇宙開発事業団（NASDA）の三機関が統合して宇宙航空研究開発機構（JAXA）が誕生した。この三機関統合までの三年

間、日本の宇宙開発の様々な課題に触れる経験をした。この会議のねらいを一言で言えば、「宇宙開発には莫大な税金が使われるため、宇宙開発の成果は国民に還元しなければならぬ」である。毎回の会議の結論は「国民への還元は子供たちの教育」であった。

浦島太郎やドラえもんなど昔からの子供たちにお馴染みの物語は、「空高く」「時空を超えて」「未知なる所」など共通した要素がある。それらは全て宇宙に通じており、子供たちは知らず知らず宇宙に触れていたといえる。好奇心をかき立てる宇宙を教育に生かし、宇宙開発の人的裾野を広げる目的のひとつとしてJAXA宇宙教育センターが神奈川県相模原市に設立された。私は三十八年間勤めた中学校教員を退職してJAXAに勤めることとし、二〇〇九年からは宇宙教育センター長として学校教育支援・社会教育支援・国際連携など様々な経験をさせて頂いた。その中でも、アポロ十七号で月面に着陸して百十キログラムもの岩石を地球に持ち帰った宇宙飛行士ハリソン・シュミット氏に講演してもらったことは貴重な経験であった。



空気や重力がある我々が住む地球は全宇宙から考えると特殊な宇宙である。身近な自然の現象も宇宙の視座（視点）で見直してみると、当たり前と思っていたことが不思議な現象に見えて、新しい発想が生まれてくる。この宇宙の視座で物事を考える教育を我々は宇宙教育と呼んでいる。宇宙教育は宇宙そのものを教えるのが目的ではなく、宇宙の目で物事を考える教育である。そのため、宇宙教育は理科だけでなくすべての教科・領域に関わり、子供たちへの教育に大いに活用できる要素を秘めている。私は宇宙が、子供たちの心を大きく育ててくれることを常に願うものである。

# 私の趣味

# カメラを友に五十年



鶴岡英夫

(S45・3卒 君津市)

本格的に写真を始めたのは、大学時代に写真部に入部した時からである。当時は白黒写真で、フィルム現像から焼き付けまですべて自分で行った。職に就いてからも学校に暗室を手作りし、クラブ活動で子供たちと撮影旅行をしたり、作品を学校の文化祭に出品したりした。



石神和世

(S44・3卒 栃木県栃木市)

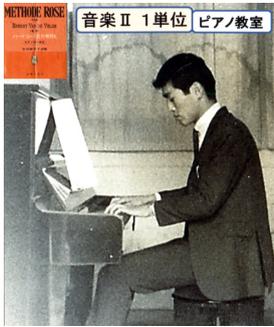
前略、同窓会報第一二四号を手にして「わが学舎の今昔」の記事に感動しました。私の「学業生活のあれやこれや」にピアノ教室の一場面があります。この写真が気に入っています。楽譜には、「夕べの星 非常に美しく」と記され、そこに、青ペンで石黒先生から合格をいただいた〇が書かれています。他に本田碩孝さんとの教育実習時の写真も。「退

# 読者の声から

校長職に就いてからは、もっぱら子供の活躍を撮影し、成長の思い出として子供にプレゼントをしてきた。退職後は、デジタルカメラに変わり、写真処理がパソコンでできるようになり楽になった。ハイキングの会に入り、毎月一回、仲間と一緒に山歩きをしながら記念写真を撮ったりした。自然の草花や風景・山旅の写真等撮り、毎年何点か君津地方教職員作品展に出品している。



職後のあれこれ」には、森靖男先輩の作品写真もあり、当号「同窓生の美術館」の立派な作品と再会でき、改めて感激しました。一学生のささやかな平素学習の一端を昔話と記録写真で紹介させていただきました。とりあえず、感嘆企画第一二四号の感想まで。時節柄くれぐれもご自愛ください。



# 銚子市支部

# 支部だより

# 山武地方支部

銚子市支部の会員は、現職会員十五名、退職会員約百十五名、計約百三十名である。

役員は、支部長(一)、副支部長(四)、監事(二)の外、理事若干名で運営に当たっている。理事若干名というのは卒業生のいない学校が増え欠員になっているからである。その数はほぼ半数に迫り、由々しき問題である。

お知らせや配布物をスムーズに配布するためにも、欠員を少なくしたいものだが世の中の情勢はそうはいきそうにもない。

特に銚子市は、日本創成会議によると千葉県三十七市の中で、消滅都市候補の一つだそうである。児童生徒数も減少し、この十年間で小学校が一、中学校一の二校が廃校になり、来年三月で小学校がもう一校、廃校の予定だそうだ。

しかし、支部としては減少している総会参加者を回復させねばならない。総会では今、話題の英語、道徳、アクティブ・ラーニングなどを話題にすることを宣伝し、参加者の回復を図ろうと考えている。

(文責 山口 尚武)

山武地方支部の会員数は、平成二十八年年度現在、非現職会員二百五十四名、現職会員は行政等勤務者を含めると百七十八名である。

支部役員は、支部長(非)、副支部長(非・現校長)、理事(非・現)、監事(非)と、旧市町村単位の地区世話係、各小学校区選出の評議員(非)で構成されている。

六月下旬に評議員会を実施。非現職・現職会員への総会案内等の配布・八十歳未満の会員からの会費の徴収を行っている。

八月下旬の総会は、二十名程度の参加があり、各種協議の他、喜寿祝い・永年勤続表彰等を行っている。総会後は、会員による趣味や文化活動をテーマにした講話・懇親会で、楽しいひとときを過ごしている

現職会員の活動としては、十一月もしくは一月に懇親会を行っている。役員の一人在現職の時に発案し、実現したもので、三十名前後の現職会員が集い、学生時代の話題や、日頃の実践の情報交換等で、年代を超えた交流がなされている。

(文責 丸尾 剛彦)